高杉良 経済小説全集 ⑫

小説 日本興業銀行 前編

佐高信 責任編集

小説 日本興業銀

高杉良経済小説全集　第12巻
小説日本興業銀行　前編

平成八年十二月十日　初版発行

著　者――高杉　良
発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三
〒102　振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八
電話／営業部〇三―三二三八―八五二一
編集部〇三―三二三八―八五五五
印刷所――暁印刷株式会社
製本所――株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本は小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
© Ryo Takasugi 1996 Printed in Japan
ISBN4-04-573712-X　C0393

高杉良　経済小説全集　第12巻　目次

小説 日本興業銀行　前編

第一章　日銀特融　7
第二章　二人の大物総裁　37
第三章　総辞職　58
第四章　再建への険しい道　89
第五章　四十五日の総裁　130
第六章　GHQとの難交渉　170
第七章　深夜の英文タイピスト　184
第八章　大臣からの極秘情報　213

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第九章　〝A or B〟の選択　223
第十章　昭電疑獄　253
第十一章　芦田内閣の倒閣　291
第十二章　再建整備完了　333
第十三章　日本開発銀行の設立　359
第十四章　川崎製鉄千葉計画　387
第十五章　造船疑獄　402
第十六章　復帰運動　428
解説　興銀を軸に見た「戦後日本産業史」　佐高信　448

装丁　安彦勝博

小説

日本興業銀行

前編

第一章　日銀特融

1

日本興業銀行の頭取室のソファで、二人の男が深刻な面持ちで向かい合っていた。頭取の中山素平と副頭取の正宗猪早夫である。

昭和四十年五月二十八日午後五時過ぎのことだ。

どんな難局に際会しようが、どんな難題に当面しようとも、めったに暗い顔を見せない中山が、珍しく眉をひそめ、口をへの字に曲げている。

「山一証券に万一のことがあれば証券業界全体がパニックになる。いや銀行だって安閑としていられないよ」

「青周から聞きましたが、山一証券の窓口に連日、客が殺到してるそうですね。きょうは二万人を超えるかもしれないと言ってました。こうなると、もう取りつけですよ」

正宗の顔も歪んでいる。青周とは、常務の青木周吉のことだ。

一週間前の二十一日に、西日本新聞が山一証券の経営難と再建策についてスクープしてから、運用預かり債券の払い出し、投資信託の解約、保護預かり口座の払い出しなどを求める客が山一証券の本店、支店の窓口に押し寄せ、普段なら三千人程度に過ぎない客数が二十二日の土曜で一万二千人、二十四日の月曜日は一万四千人、二十五日は一万七千人にも及び、まさに取りつけ的様相を呈していた。

新聞報道のあった二十一日の午後、山一証券社長の日高輝は、中山興銀頭取、岩佐凱実富士銀行頭取、中村俊男三菱銀行副頭取の主力三行の首脳と共に記者会見に臨み、関係銀行の金利タナ上げが決定したことなどによって、同社の再建見通しがついたことを明らかにした。

大蔵省、日銀も事態を重視し、田中角栄大蔵大臣、佐々木直日銀副総裁が同日、それぞれ急遽記者会見を行なった。この中で田中蔵相は、

「関係十三行の金利タナ上げ措置を決め手とする再建案がすでに用意されているので、山一再建の目途はついている」

と強調、佐々木日銀副総裁は、

「日銀は山一再建に協力を惜しまない」

と表明した。

いわば、投資家の不安動揺を抑え、信用秩序維持を図るために、官民あげて懸命の取り組みを示したといえる。

しかし、山一証券に対する運用預かりなどの解約が激増している事実は、こうした努力が焼け石に水と思えるほど事態の深刻さを裏付け、不安が不安を呼んで、証券業界全体が累卵の危うきにあったといっていい。

日高が記者会見で発表した山一証券の再建策は、

①都長銀十三行の融資額約二百億円の約定金利全額、信託銀行の融資額六十億円の約定金利のうち日歩一銭を超える分を差し当たり三年間タナ上げする。この間は元本の返済も猶予する。これによって月額約一億五千万円の金利負担を軽減する

②遊休資産などの処分、店舗および従業員の削減、経費節減などの経営合理化を進め、経常収支の均衡を図る

――の二点が骨子となっているが、この程度の再建策で、山一が甦えるとは、当の日高も、また中山も思ってはいなかった。

山一証券の経営状況は、いつ倒産しても仕方がないほどの惨状を呈していたのである。

正宗猪早夫がセンターテーブルに湯呑みを戻して言った。

「今夜の会合で、山一救済の抜本策が決まるとよろしいですね」

「大蔵省は腹をくくってるようだが、日銀がどうもはっきりしない……」

中山素平は煙草にライターで火をつけて、話をつづけた。

「日銀の立場として、個別企業に対し支援しにくい事情は理解できないことはないし、無担保貸し出しを渋ることもわかるが、いまは公式論をうんぬんしているときではないからねえ」

正宗の言う今夜の会合とは、大蔵、日銀、幹事銀行の三者首脳が日銀氷川寮に集まり、山一証券の救済問題について協議することになっていたが、この氷川会談を指している。

出席予定者は、田中角栄大蔵大臣、佐藤一郎同省事務次官、高橋俊英同省銀行局長、加治木俊道同省財務調査官、佐々木直日銀副総裁および中山素平興銀、岩佐凱実富士銀行、田実渉三菱銀行の三頭取である。

氷川会談は、加治木の根回しによるものだが、中山が加治木に働きかけて実現したのである。

もちろん、極秘裡にすすめられ、目下のところマスコミに嗅ぎつけられた形跡はない。

「銀行界にはこの期に及んでも自己責任の原則論をふりかざして、放漫経営で潰れるものを救済する必要はない、と突き放したようなことを言う向きもある。たしかに理屈は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その通りだが、山一が倒産すれば、それが引き金になって金融界全体に波及することは眼に見えている。金融恐慌に発展しかねないことに思いを致せば、ひとごとみたいなことは言っておれないはずなんだ」

中山は三分の一ほど吸った煙草を灰皿に捨て、腕を組んで天井を仰いだ。

「日銀が救済融資に踏み切ってくれませんと、山一は危ないでしょうね」

「角さんがリーダーシップを発揮してくれるといいんだが」

中山は吐息まじりに返した。

昭和二年の金融恐慌のことが中山の脳裡から離れなかった。東京商科大学（現一橋大学）の二年生だった中山は、戸塚球場に野球見物に行く途中、群衆が銀行に殺到する凄まじい光景に遭遇したことがある。その場面がいまでも目に焼きついていた。

時の蔵相、片岡直温が議会で渡辺銀行の窮状に言及したことに端を発し、取りつけ騒ぎから、金融恐慌へと拡大していくが、中山の卒業論文のテーマが金融恐慌問題を扱った「景気変動理論に於ける金融中心説の一考察」であることは、このときの体験に根ざしているととれないこともない。

「今夜は相当揉めることになりますかねえ」

「うん。徹夜みたいなことになるかもしれないね」

「〝亀清〟へは来られませんか」

「顔を出したいが、ちょっと無理だろう。きみにまかせるよ」

この日、五月二十八日は興銀の定時株主総会開催日で、夜は柳橋の料亭〝亀清〟で恒例の役員懇親会が行なわれることになっていたが、頭取の欠席は過去に例がなかった。

「日高さんもついてませんね。夜も眠れないんじゃないですか」

「それを言われると辛いな。日高君を山一の社長に担ぎ出した張本人は僕だからね」

中山は苦笑しながら返した。

中山と日高輝は、昭和四年に興銀に入行した同期で、「そっぺいさん」「テルさん」と呼び合う仲である。

日高は昭和三十五年に興銀常務から日産化学の副社長に転じ、社長に昇格した後、半年前の三十九年十一月に、日産化学社長を退任して山一証券社長に就任した。

「しかし、神経は太いほうだから夜も眠れないってことはないだろう。緊急に連絡したくて、山一へ電話を入れると、経済同友会の幹事会に出てるとか、つまらんパーティに出席してるとかで、席を外してることが多い。僕が電話する

と決まって留守なんだ。きみの会社の社長はそんな呑気なことでいいのかって腹立ちまぎれに山一の秘書に言ってやったことがあるよ。ゴルフにも欠かさず行ってるらしい……」

「日高さんらしいですね。社長が動揺の色を見せれば、社員の士気に影響しますから、ことさらに悠然と構えてるんでしょう」

「ま、そうだろう。日高君も僕と同じで、天の邪鬼なんだ」

中山は正宗に微笑み返したが、すぐに表情をひきしめた。

「あの呑気坊主もさすがに顔色を変えている。危急存亡の秋だから、それも当然だが……」

ノックの音が聞こえ、秘書役の森嶋東三が頭取室へ入ってきた。眉が、毛虫を二匹這わせたように太くて濃い。二重瞼の眼も大きいが、やさしくまたたいている。

「日高社長から電話ですが、つないでよろしいですか。至急連絡したいことがあるようですが」

中山と正宗が顔を見合わせた。

「いいよ」

中山は、森嶋を見上げた眼を正宗に戻して、笑いかけた。

「それじゃあ、役員懇親会のほうはよろしくたのむよ」

中山は、腰をあげて、ゆっくりデスクのほうへ歩いて行った。

「いま、日高さんのことを話してたところなんだ」

「なるほど、噂をすれば影ですか」

森嶋が正宗に返して、そそくさと部屋から出て行った。

正宗も退室した。

中山は、デスクの前に腰をおろして受話器を取った。

「中山です。いま、正宗ときみのことを話してたところだよ」

「わたしは、いま湊君と渡辺君に応援を頼んできたが、いざというときはできるだけのことはしようと約束してくれたよ。きみからも、日高を援けてやるように言われてると話してたが、いろいろありがとう」

日高の声がくぐもっている。

中山は、受話器を右手に持ち替えた。

「湊君のところも楽じゃないはずだが、山一の火を消さないことには大変なことになるからね。取りつけのようなことになってると聞いたが……」

「この一週間で運用預かりなどの解約累計は百五十億円からになりそうだ。ありていを言えば、きょうあしたにも手をあげなければならない状態だ。とても持ちこたえられそうもない……」

日高の声に悲痛な響きが伴っている。

湊守篤は、興銀のOBで日興証券の社長である。昭和六年の入行で、三十六年に興銀常務から日興証券の副社長に転出、三十九年に社長に昇格した。日興証券専務の渡辺省吾も興銀のOBで、昭和十三年の入行組だ。

「昼過ぎに富士銀行の佐々木副頭取にも会ったが、当座のオーバードラフト（当座貸し越し）をお願いするようなことになりかねないと言ったら、それでも銀行出身かって、叱られたよ。佐々木君に日銀の考える問題だと言われたが、今夜の会議で、なんとか救済策を打ち出してもらえるとありがたいんだがなあ」

「僕も日銀に救済してもらう以外にないと思う。なんとか頑張ってみるが、日銀の態度がいまひとつ煮え切らないんでねえ」

「夜中でもかまわんから、会議が終わり次第、会社に電話をもらえるとありがたいな。今夜は必ず席にいるから、よろしくたのむよ」

「……」

「すまないが、直通の電話番号を控えてくれないか」

「どうぞ」

中山は、山一証券の社長執務室の直通番号をメモに書き取って、電話を切った。

時計に眼を落とすと、五時二十五分過ぎである。そろそろ日銀氷川寮へ出かけなければならない。

中山は、森嶋秘書役に、遅くなってもいったん銀行に帰ると言い置いて、エレベーターで地下一階の駐車場へ向かった。

2

丸の内の興銀本店から赤坂の日銀氷川寮に向かう車の中で、中山は、山一証券の社長になってほしいと日高をかき口説いたときのことを思い出していた。

前年三十九年九月に、経営難に陥っている山一証券に社長を派遣してほしい、と中山に要請してきたのは、富士銀行頭取の岩佐凱実で、岩佐はたとえば当時興銀副頭取の石井一郎はどうかと打診してきたが、中山は、アラビア石油社長の小林中からも、同様の要請を受けていた。

小林は郷里が同じ山梨の小池厚之助山一証券会長から、興銀から人材を派遣してもらいたいので、斡旋してほしいと依頼され、中山に相談をもちかけてきたが、小林が推しているのは日高輝であった。

中山は元興銀総裁の伊藤謙二、川北禎一を個別に昼食に誘って、意見を聞いたところ、ここでも意見が分かれ、伊藤は日高、川北は石井を推薦した。石井も、中山、日高と

同じ昭和四年の入行組であるが、川北が現役副頭取の重みを重視したのに対して、伊藤は経験に重きを置いた結果、日高を推したとみてとれる。

伊藤謙二は、興銀で証券部門を担当した経験から、証券業界に精通している日高輝を山一証券の社長に推薦したわけだが、中山素平にも、伊藤の意見により説得力があるように思えた。

日高は、戦前、栗栖赳夫（元興銀総裁）の証券部長時代に部下として仕えたばかりでなく、戦後の一時期、証券部長を経験し、証券業界には顔が売れている。しかも、日産化学の経営立て直しで、なみなみならぬ手腕を発揮した——。

中山は、日高を山一へ送り込もうと肚を固めた。

しかし、興銀の現役ならいざ知らず、日産化学の社長である日高を動かそうというのだから、ことは容易ではない。日産化学の事情もあろうし、本人に厭だと言われたらそれまでである。

なにはともあれ直接、本人に当たるしかない、と中山は思った。早速、秘書役の森嶋に連絡をとらせると、日高はカナダへ出張しているという。

外遊中の日高が帰国すると聞いて、中山が羽田空港へ迎えに行ったのは十月八日の夜九時過ぎのことだ。

日高は、国際線の到着ロビーで中山を見かけたとき、外国の要人でも出迎えに来ていて、偶然出くわしたのかと思った。

「やあ、おかえりなさい」

中山が手をあげて、近づいて来た。

「しばらくじゃないか。どなたかえらい人のお出迎えかい」

「えらい人はここにいるよ」

中山はいたずらっぽく笑って、日高を指差した。

「テルさんの帰国を心待ちしてたんだ」

「……」

日高は唖然とした顔で中山を見やった。

「せっかく秘書のかたが迎えに来てるんだから、荷物は自宅へ届けてもらったらいいね。テルさんは、僕の車で送らせてもらう」

中山は、呆然と立ち尽くしている日高を抱きかかえるようにして、ロビーから連れ出した。

車の中で日高がわれに返って言った。

「羽田に着くなりそっぺいに拉致されるとは思わなかったな」

「夕食まだなんだが、鮨でもどうかな」

「いいね。どんな魂胆があるか知らないが、これだけひと

をびっくりさせたんだから、鮨ぐらいおごるのは当然だよ」
「おっしゃるとおりだね。鮨ぐらいでいいのかなあ。料亭にしようか」
「いや、鮨がいいな。旨い鮨が食べたいね」
「ニュージャパンへ行ってください」
中山は運転手に指示した。赤坂のホテルニュージャパンに行きつけの寿司屋があるが、そこで日高をもてなそうと中山は咄嗟に思った。
日高は三週間ほどカナダとアメリカを旅して、和食に飢えているはずなのだ。
車の中で中山が訊いた。
「カナダだけと聞いていたが、アメリカへ回ったそうだね」
「シカゴの銀行からインパクトローン（使途に制限のない外貨借り入れ）をやろうと思ってね。ウェイティングリストに加えてもらえたよ」
中山の表情が翳った。
「そうすると、まだ交渉中ということになるな。社長のきみがいなくなると、国際信義にもとることになるのかねえ」
「わたしの首のすげ替えをやろうっていうことだな」
「そんな僭越なことは言わんよ。あくまでもお願いベースの話だ」
「社長が代わったからって、とくに問題はないだろうな。日高個人ではなく、日産化学として交渉しているわけだから」
中山は愁眉をひらいた。日産化学にとって日高の存在はあまりにも大きい。インパクトローンに限らず、日高のリーダーシップによってさぞかしいろいろな商談や交渉が進められていると察しがつく。その日高を山一証券に引き抜こうという強引なことをやろうとしているのである。
国際信義上、いま日産化学の社長を辞めることはできない、と言われてしまえばそれまでだ。
しかし、その点は心配するには及ばないとなれば、脈はあるということになる。中山は内心、しめたと思った。あとは押しの一手でかき口説くだけである。
「しかし、まだ日産化学でやることがたくさんあるから、なにをたくらんでるか知らんが、無理だよ」
日高はむすっとした顔で釘をさした。
「ま、鮨でも食べながらゆっくり話そう」
中山はポケットから煙草を取り出して、日高にすすめた。
日高が手を振ったので、中山は吸うのを我慢して、煙草をポケットにしまった。

車が、赤坂のホテルニュージャパンに着いたのは十時近かった。

ホテルの寿司屋のカウンターで、鮨ダネを肴に日本酒を飲みながら中山が切り出した。

「山一証券が苦しくなっている。テルさんにリリーフを頼みたいんだが……」

「冗談じゃない。日産化学はやっと復配したばかりだ。やらなければならないことが山ほどあるんだ」

日高は間髪を入れずに答えた。

「宇佐美さんや、岩佐さんのたっての頼みでもある。テルさん以外に山一の社長候補はおらんのだよ」

中山はやわらかく言い返した。

この時点で宇佐美洵は三菱銀行の頭取で、宇佐美が山際正道の後を襲って、日銀総裁に就任するのは二カ月後のことだ。

この夜は、中山素平はあっさり引き下がった。アメリカから帰国したばかりの日高輝をいつまでも拘束するわけにはいかない。

しかし、次の日も日高を夕食に誘い出した。

赤坂の料亭〝松室〟で食事をしながら、中山は懸命に日高を口説いた。

「全部話してしまうが、きみの外遊中に山一証券の小池会長がコバチュウさんに泣きついたのがこの話の発端なんだ。前後して岩佐さんからも僕に話があった。なんとしても興銀から人を出してほしいということなんだよ」

中山の言うコバチュウさんとは日本開発銀行の初代総裁で、当時アラビア石油社長の小林中のことである。

「コバチュウさんまでかかわってるのか」

日高はひとりごちて、杯を口へ運んだ。

中山が銚子をもちあげて、酌をした。

〝松室〟の女将の私室で、人払いをして、中山と日高はテーブルに向かい合っている。

小林中は財界の大御所で、興銀との関係も深い。

中山は一時期、開銀の理事として、小林に仕えたことがあるが、日高にとっても小林は師であり、私淑している大先輩である。

小林の名前を聞いて、日高はこれは容易ならざることだと思った。

「無理は百も承知だが、ほかに適当な人がおらんのだ」

「石井君はどう？　興銀の副頭取なら申し分ないじゃないの」

「それも考えたが、テルさんを推してるのはコバチュウさんだけじゃない。伊藤謙二さんにも相談したんだが、テルさんしかおらんと言っていた。きみは証券界では顔が広い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.